

# 腎癌に対する薬物療法

## 最新エビデンスを実臨床に活かす

### 企画にあたって

2008年に2剤の分子標的薬が実臨床の場において使用可能となって以降、腎癌に対する薬物療法は今なお現在進行形で変革の最中にあると言っても過言ではありません。6種類の分子標的薬に加え、2016年からはImmuno-Oncology (I-O) drugであるニボルマブも保険収載されました。さらに2017年にはI-O drugの併用療法を1st-lineで導入することによる予後改善効果が報告され、現在も分子標的薬とI-O drugの併用療法の効果を検証する複数の臨床試験が進行中であり、近い将来、腎癌に対する薬物療法の指針がまたもや大きく変化するのには必至の情勢です。

次々と新規薬剤が使用可能となり、腎癌患者に対する薬物療法の選択肢が増加すること自体は大変好ましく、サイトカイン療法時代に比べ昨今の進行腎癌患者の予後は間違いなく改善しています。一方で、これほど短期間に多様な薬物療法が登場してくると、臨床現場は、“福音”と“混乱”が背中合わせの微妙な状況にあるのではないのでしょうか。実際、「逐次治療」「副作用対策」「バイオマーカー」「医療経済」等々、本領域の問題点を象徴するキーワードは枚挙に暇がありません。しかし、この状況を“福音”とするのも“混乱”とするのも、結局はわれわれ泌尿器科医の見識次第であると思います。

このような現況を鑑み、本特集では腎癌に対する薬物療法に関する主要な問題点を網羅するようにテーマを設定し、同療法のエキスパートの先生方に、エビデンスの羅列ではなく、実臨床の場で活かした知識となるような解説をお願いしました。本特集が、進行腎癌患者の治療に従事する先生方のお役に立ち、本邦の腎癌薬物療法の健全な進歩に貢献することを願っています。

浜松医科大学医学部  
泌尿器科学講座

三宅 秀明